



# 会 報

第4号

昭和59年1月

## 社団法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025

### 第一回「会員の集い、華やかに開催

(倉田公裕道立近代美術館長特別講演  
福引会の楽しみパーティー)

社団法人北海道美術館協力会は、会員であることの自覚を一層高めるためと、相互の親睦をはかるために、去る十二月三日午後四時から、道立近代美術館で、倉田館長の会員のための特別講演の後、カクテルパーティーが行われた。

館長の講演は「美・美術・美術館」と題し、古今東西の美の流れをスライドでマルチ映写し、幅広い会員のために、要領よくかつ感動的に講演され、満席の会員たちを満足させた。

一時間弱の講演の後、席はロビーのカクテルパーティーに移された。橋本禮三道教育庁社会教育部長のカンパいの音頭によって親睦パーティーは開かれた。

年間一万円を納める会員でありながら、なかなか美術館を訪れる機会をもたない、会員785人をメインゲストにして、理事、ボランティア部隊が、ホスト、ホステス役を引き受け、会員への積極参加をうながすことが「会員の集い」の主たる目的であった。

#### ※ 福引にわく会場

美術館協力会の趣旨を理解し、「会員の集い」を一層華やかかつ楽しいものにするために、近代美術館に作品が収蔵されている札幌在住の画家、版画家、彫刻家の諸氏から福引の景品として、色紙、版画等が寄贈された。堂垣内前知事、板垣札幌市長の色紙も会を一層盛りあげた。また、美術館内にある売店に協賛している関係者からも数々のオリジナル品が寄せられ、福引発表をわきたたせていた。



#### ※ 「初の会員顔合せ、

美術館協力会発足六年目にして試みられた会員親睦パーティーであったが、220名の参加があり、35人の新入会員があったことは大成功といえよう。

この成功は、また、閉館後、館長をはじめ、課長以上の管理職々員全員が勤務外時間にもかかわらず、協力の労をおしまず積極的に手助してくれたことにある。



## 第4回 ヨーロッパ美の探訪旅行に 参加して

吉田 徳二郎



パリ・ノートルダム寺院を背に

### ※ マドリードへの道、21時間空路の旅

成田空港は、日本の玄関口である。

初冬の佇みに、どんよりとしていた千歳から僅か一時間半程飛んできたのに成田は快晴の秋空であった。旅行のさきを占うような爽かさである。11月の20日(日)、マドリード・パリ・アムステルダムに向って8日間の旅に出発する日だ。私共の旅行団はコーディネータの美術館の鈴木正実さん・添乗員の日航の増井俊昭・黒田秀徳さんを入れて団長に阿部・副団長に朝田さんを加えた53名である。

出国の諸手続は添乗員の方々の手馴れた措置で些かも心を労することもなく、また細かで親切なご指示を頂き身軽に機上に身を託した。日航411のジャンボ機は、21時30分成田空港を飛立ち西太平洋のアリュシャン列島の上空を快適な飛行を続け現地時間の9時40分頃第一の給油地アラスカのアンガレッジ空港に翼を休めた。

ツンドラの曠野・凍りついた多くの湖沼・千古の雪に覆われているマッケンレイの連山が美しい。ここを出ると機首を西に向けて北極の真上近くの氷海を見下ろして飛ぶ。神秘的なまでに静寂な北氷の海は冒し難い神聖な域のようである。コペンハーゲンの夜はまだ明けていなかった、整然と点灯された夜の街を遠望してチューリッヒに向う。翌日の現地時間9時近く空港に着き約3時間の待合せてある。特別の取扱いでターミナルの内外を見てスイスの空気にもふれることが出来た。

ここでSR 650のスイス航空に乗り移りマドリードに、機内は各国人が乗込み国際色豊かである。快晴の眼下に展望するアルプス連峰と氷河の絶景は素晴らしかった。一同嘆声を発して窓を覗き込んだ。かくして21時間余の空の旅をして第一の目的地マドリードのバラハス空港に翌日の14時15分着陸した。

### ※ 光と影の国・情熱的でエキゾチックな街マドリード

空港は、赤褐色の広野の中に造られ、気飾りのない明るい親しみを感じた。空港から市内までのバスには現地に永がく滞在していた石岡さん(女)が乗り合せて、スペインの国柄や風景のほか通貨交換や買物・チップ等入門的な知識と旅行心得を教えてくれた。約30分でアルカラ通りから市内に入った。市街の建物は南国的な明るさを見せ処々に中世紀の名残りを留めている。フェルタ・デル・ソン(太陽の門という意)を出ると国際観光都市スペインの情緒を漂わせ通路や交通機関が集中し賑いである。グラン・ビアの中心繁華街からスペイン広場等の市内観光箇所を巡る。スペイン広場にあるセルバンテス記念碑とドンキホーテの像が如何にもスペインらしい。異国の街の古い事物に触れ長途の疲れを慰められた。市街中心部の閑静なアグマルホテルに旅装を解く。

ホテルは入口は狭いが中は可成り広く古風な手の込んだ作りが随所にあった。スペインカラの格調を備えていた。ホテルの夕食に魚介類を混えたお米の煮込み風

なのが出され、ここで米飯に出会ったのには驚いた。

旅行の3日目の22日である。一夜を明かしたマドリードの空は曇りがち、パンとコーヒーの簡単な朝食を取り殆んど落葉したプラタナスの街路を歩いてプラド美術館まで歩く。左側はレティエロ公園である。とても広い。

落葉した木々に静まり返っている。その前側に古風な二階建のプラド美術館がある。多くの個室に分れスペインを始めイタリア・ドイツ等の画家の名作が展示されて流石に世界の三大美術館としての内容を備えている。

鈴木課長さんの案内でスペイン派の作品に焦点を絞って解説を聞きながら鑑賞することが出来た。エル・グレコの「復活」や「羊飼いの礼拝」「聖処女戴冠」などの傑作が二室に飾られ、またベラスケスの作品も二階の幾室をも領し「糸をつぐむ女たち」「王女」等が目を惹く。なじみ深いゴヤの作品「着衣のマハ」「裸のマハ」「カルロス四世の家族」の傑作・ナポレオンに抵抗した時代の作品等やはりここでしか見られな



マドリード闘牛場前広場

い深い感銘を覚えた。

これだけのコレクションを今日まで集積保存したスペイン旧王家の功績は偉大であったと思う。そして世界の海に君臨した16・7世紀頃のスペインの栄光とその盛衰にふと感傷をも覚えた。

午後はトレドの半日観光に出かける。

マドリードから南へ約70K余である。

煉瓦工場の点在する郊外を抜けると坦々とした広い道路が起伏を縫うようにして一直線に延びている、オリブの赤土の陵線に見え隠れして果しくつづく、やがて遙か遠方にトレドの古都が見えて来た。海拔530mの丘の上のこの街は、6世紀以来約1000年間スペインの首府のおかれた処である。

ヨーロッパでも最も古い都であるといわれている。街全体が歴史博物館であり城壁である。迷路のような狭い石畳の小路に中世の町が見事に生きていた。周遊を巡るタホ川の流れるは歴史の変遷を幾度も映じたことだろう。

サンタ・イサベルの石畳の通りを歩くと中世の騎士の足音が聞えるようであった。

ここではグレコの家が印象に残った。

不朽の画家が居住した閑素な内部と「トレド市展望と地図」という精巧を極めた作品が記憶に生々しい。ア

ルカントラの橋やサンバンド城のようなアラビヤ風の建築を眺め飽きることがなかった。トレドに来てスペインは良いなあと同音に語り合った。小雨の中を復路を走りつづけマドリードについては20時近くである。一体の間もなくガイドの藤赤さんの案内でフラメンコショーに出かける。

キンタナというレストランでガルシャ地方の料理というスペイン料理を頂く、日本人向けの食べ易さだ。

フラメンコ・ショーの劇場に入ったのは22時近くである。幾何学的？に組立てられた建物の内部構造と舞台の装置がとてもマッチし座席は二段に分かれけ舞台に向って放射形に並んでいる。エキゾチックな雰囲気だ。

やがて3人の美しい踊り子が出てカステネットを鳴らしながら踊る。ついでギターを引く男の歌手がバスで力強く歌う。男女の組の踊り子が狂ったような情熱で、交互に歌い踊りつづける。時々「オーレ」と囃を入れて観客に叫びかける。ワインを飲みながら見ているうちにどこか哀愁なメロディを不思議と感じた。

この踊りは、ジプシーが伝えたといわれる。

スペインでの最後の夜の思い出に良い見物であった。

旅行も後半に入る4日目である。早朝の出発で空港に着いてやっと薄明だ。イベリヤ航空IB、164で9時40分マドリードを離陸してパリのオルリー空港まで2時間・11時15分到着した。

## ※ 芸術の華開く世界の都・パリ

この日の午後はパリの市内見物である。中山さんという元気な女性のガイドが案内する。

セヌ河の両岸に見る都市美は格別でやはり世界の都パリである。国際都市らしく街路を行く人々の容貌も多彩で目を奪う。

先づシテ島のノートルダム大聖堂を訪れた。

1163年に建立が開始され1250年に完成されたというゴシック様式の代表的な建築の寺院はパリの象徴でもある。

中央の「最後の審判」を始め、その上に「アダムとイブ」等の名彫刻があり内面や両側壁のステンドグラス等美を極めている。

この寺院とセヌ川をバックに記念写真を撮りモンマルトに向った。オペラ広場の賑かな市街地を通り抜けモンマルト墓地の中を径てモンマルトの丘につく。パリで一番高い処だそう。サクレ・クル寺院から晴れ渡ったパリの市街が一望の中に収められる。すぐ裏がモンマルトの広場である。カンパスを架けて画く人。見る人・買う人・売る人の観光客で処狭しの賑いである。ホテル・ニコッまでの帰路はコンコルド広場・ドゴール広場・凱旋門を得て夕闇の中にエッフェル塔を眺めながらセヌ河畔のホテルに着いた。日本語が



マドリード、フラメンコ

通ぶるこのホテルはやはり心易かった。

24日はバリの美術館巡りから始まった。

ルーブル美術館・印象派美術館・ボンピド文化芸術センタと込み入ったスケジュールである。先ブルーブル美術館に、ここは世界最大の美術館である。12世紀末に建てられた宮殿であり城砦でもある。「コ」の字形の三階建ての巨大な美術館には、20万点を越す美術品が保存されている。各国からここを訪れる物凄い観



ルーブル美術館  
(鈴木課長から解説を受ける)

光客に吞まれ、その人波に流されるように入館した。ここだけでも2・3日はかかるという。鈴木課長さんの案内やガイドさん塔乗員の方々の指示がなかったならば途方もない広さと作品量に恐れて入館の足跡を残して帰らざるを得なかったのではないだろうか。

名彫刻品や宗教画の間を縫ってレオナルド・ダヴィッチの「聖母子と聖アンナ」「モナリザ」の前に立って救われたような気がした。大作の並ぶ中に見逃すような小作だが、ここで見るとやはり神秘的な名画で心を惹かれた。

ラファエロやレンブラント・グレコ等の名画が心の中に残っている。

作品の学究的な鑑賞は専門の方々にお願ひし、私達はそれぞれの眼で、心の中で鑑賞を強く焼付けて帰ればよいと思った。

ここで半日を費し午後は他の美術館巡りと夜はオプショナルツアーに行った。参加した人はバリの想い出に心を満たしたとことと思う。

私は今一度とかつて歩いた市街を散歩した。

最終コースの25日はバリ残留組とアムステルダムの一泊旅行に別れた。私は後の組に加わりホテルの早朝出発、ドゴール空港で輝やくバリの空が明るくなった。

アムステルダムまで1時間の空路である。

### ※ 夢の国、童話の街アムステルダム

スキポール国際空港に着いたのは8時30分、ここでは滞在16年という優しい伊藤さんがガイドした。市街に向う途中木靴の工場を見学したが、お隣の国にきたようでびっくりした。この楽しい印象と雰囲気はアムステルダムを離れるまで消えなかった。オランダ全体の姿かも知れない。

両側に見る美しい運河と小さくてきれいに並んでいる郊外の部落の建物を眺めながら市内に入る。到る所に運河が縦横に流れ道路がそれに沿って走っている。100近い島と約910の橋があるという。夢の浮島だ。

国立博物館もフランスルネッサンス期の城館を偲ばせる復古様式の建物でこの街にピッタリの感かする。ここではレンブラントの「夜警」が特に歩を留めた。多くの名作品が無防備に手の届くような処に整然と展示され教育の場にもなっているという。ゴッホの美術館は対照的に明るい4階建の近代建築である。日本の江戸浮世絵にヒントを得たゴッホの作品が頭に残っている。美術館を出て郊外に出る途中立寄ったレストランについて添記したい。

温室の中で人形の食堂かと思われた位美しく見事な調和のとれた飾りや構えは私がいまだかつて見たことのない童話の家であった。食べ物も美味かった。郊外の農村をバスドライブして、クレストホテルに夕刻到着した。市の郊外の近代的な高層建築群の中にあつたが落付いた室内装飾と設備は一種の格調さえ保っていた。

旅行最終の26日オランダの代表的な風物である風車見物のツアーに参加した。

郊外的高速道路は絵を見るようなオランダの農村風景である。車窓を眺めながら風車部落についた。静かな河を上下する船、都会のような村の家々、運河には家鴨が浮び一幅の絵だ。そして大きな風車が点在して更に景観を添えている。到底筆舌にて尽し得ない。生涯忘れることは無かろう。帰途は昨日巡り残した市街地の中央駅や花の市をバスの中から眺めオランダの旅情を満喫した。



アムステルダム、ミランダ店にて昼食

### ※ 帰国のみち

空港でバリ残留の皆と合流し、旅の思い出を話題に帰国の途についた。アンカレッジを出る頃から機内は静かになり殆んど眠り入っている。楽しかった旅路に満足した安らぎか。

成田空港を経て千歳に着いたのは27日(日)の19時35分である。

粉雪がちらついていたが、全員無事で帰って来た嬉しさに寒さを感じなかった。

8日間のこの旅行で私達に与えられた収穫は大きく豊かであった。文化や芸術こそ人類の遺産として後世に残さねばならない。そして美しい日本が文化国家としても誇り得るものを持ちたいと痛感した。

この旅行を企画し協力して下された、美術館、協力の会の方々や旅行のお世話を頂いた日航の増井・黒田さんに厚くお礼を申述べて拙い旅行記を終ります。



## 旅の感想—コーディネーターとして参加して

鈴木 正實(北海道立近代美術館・学芸第二課長)



ブラド美術館で、ヴェラスケスの「ラス・メニナス」をはじめボッシュ、グレコなどの作品を経て、ゴヤの黒い絵を解説していた時、そで口を軽くひっぱられてふり向くと、そこに青いブレザーを着た五十がらみの男がこわい顔をして立っていた。

胸のワッペンを見て、ああ、ここにも解説者のユニオンがあるのか、とただちに感じた。勝手にやってはいかん、自分を雇え、と言うのだ。解説を中止し、再びゴヤの「マハ」の前で始めたら、その男はつき出た壁のかげから、じっとこちらの様子をうかがっていた。こっそり後をつけてきたのである。そのしつっこさには閉口したが彼が解説で生計を立てている以上、それはあたりまえのことであり、少々気の毒にも思え



出発前の研修風景

た。

その男をはじめ、マドリッドでわずかに接触を持った人たち、例えば街で道を尋ねたら、わざわざ我々を目的の場所まで案内してくれた男、スペイン広場で眼に涙をうかべ哀願する口調、手ぶりで近づいてきた物乞いのよく肥えた女性、ホテルのバーテンのラファエルロさん(奥さんの名はカルメン)などなど、貧富の差のはげしいと言われるスペインにあって、彼らはまちがいなく富の部類には属さない下町の人ばかりで、大いに好感が持てた。

これらの人々が行きかうマドリッドの街景は、あちらこちらに由緒ある王宮や建造物が立ちならび、さすがに歴史の重みというものを感じさせた。今でこそ国際政治のうえであり大きな力は持たないが、近世にはポルトガルとともにヨーロッパで最初に海外進出にのりだした実績を持ち、ローマ法王をして「ヨーロッパ以外の新しい土地の発見は、みなポルトガルとスペインのもの」と言わしめた、そのスペインの歴史の重みである。

事前の説明会で「美術作品の鑑賞ばかりでなく、その国の街のたたずまいや人々の生活にも眼を向けましょう」と、もっともらしいことを言ったが、マドリッドに着いて、これはまちがったことではないと感じた。

街を歩き、人々と接して、その国の歴史や現状のほんの一端でも知ることができれば、それは、その国に生み出された美術を側面、背面から眺めるのにきわめて有効な手だてとなるからである。

トレドの丘は時空をこえて忽然と現出した中世の街、という感があり、ただもう「すばらしい、という言葉が発せられるのみ。

フランスは、あいにく皆さんがパリ市内見学をしている間、私はルーヴル美術館にあって、いかにこの巨大な迷路を効率よく案内するかと思案していたので、ノートルダム寺院以外にはモンマルトルの丘も、凱旋門も、シャンゼリゼ通りも見ることができなかった。したがってマドリッドにくらべてあまり記憶に残るものが少ないが、なんといってもルーヴル美術館の作品群——それも西洋美術の画集をめくると、あちこちのページに出てくる名品ばかり——には圧倒されっぱなしであった。さすが聞きしに優るルーヴル!である。無骨なスケルトン構造でパリっ子の話題をさらったポンピドー文化センターもおもしろかった。

また、パリっ子との接触は、タクシーの運転手ぐらいにしぼられるが、これはどうということはない。金髪のパリジャンにもついにおめにかかれなかった。ただ、ルーヴル宮のまわりにたむろしていたジブシーの少年達の、すきさえあらば一丁仕事をするぞ、というはっつい眼つきは印象的であった。

パリは初冬の冷たくうす暗い気候のなかにあったが、

オランダはより一層それを感じさせた。天気あまりよくなかったのだ。地平線が低いために灰色の空がより大きく重く感ぜられ、白い窓ワクの絵本に出てくるような美しい家並も、ころなしかくすんで見えた。あの空の広がり、この地方の画家たちに風景画を描くことをうながしたのだと思った。

しかし、ヨーロッパの風景画の発祥の地にもかかわらず、アムステルダム国立美術館には、それが少なかったようである。なんといいても、レンブラントの「夜警」が、一番眼を惹いた。ヴェルメールの「牛乳



を注ぐ女」「青衣の女」の前に進んだ時、だけれど「あれっ、こんなに小さな絵だったの」とおどろいたような声をあげた。私も同感だった。それだけに、よく描き込まれた緻密な美しさを持った作品であった。

我々が着いた日、アムステルダムはこの国始めて以来、はじめての公務員ストライキということで、市電も市バスも動いていなかった。不況のため2年続きで賃金カットをされたためであるという。そういえば、マドリードも庶民は質素な生活を送っていたようである。ちなみに、幅広タイヤの車は1台も見なかったようである。だいたい20歳そこそこの若者は車を持っていないのである。どう話し合いがついたのかわからないが、翌日、つまり我々が帰国の日には、ストは解消になっていた。しかし、ハイネッケンの社長の誘拐事件は、この時点ではまだ解決がついていなかった。

玉ねぎのみじん切りをつけて食べる生鯉がきわめて美味だった。おかげでパリで食べた生ガキの味を思い出した。アムステルダムで見かけた猫たちは、みな丸々と肥えて大きかった。水上生活者の美しく彩色された船が、陸の家々よりも豪華に見えた……エトセトラ。

とにかく、旅行の間、どの国でも見るもの、聞くもの、食べるもの、全てが新鮮な感動をともなって記憶に残った。

成田空港に着いて、マドリードの空港で事故があったことを聞いた。着陸5分前の墜落ということだった。ということは、あのスペインの赤茶けた大地がすでにはっきりと視界に入るところまで飛行機は降りていたはずだ。

往路、約20時間の長い飛行が終わりに近づき、我々はこの赤い土を見て、ようやくスペインに着いたと喜んだものだ。事故の報を聞いて、私はその時の感慨を



再び思い起こすことができなくなっていた。

おおげさに言えば、生と死の対比がごく身近にあると実感したわけだが、その感じは、すでにプラド美術館から始まっていた。ヨーロッパ美術の底流にどうしようもなく存在する生と死のテーマであり、それはプラドのブリューゲルの「死の勝利」、ルーヴルのラ・トゥールの「マグダラのマリヤ」など、さまざまな表現形態をもって美術館のこちらの壁、あちらの壁に、という具合に並べられていた。

輪廻という円環上に生と死をとらえようとする仏教思想とは違い、ヨーロッパには直線上に生と死をとらえる思想があるのだ、始まりがあればかならず終りがある、という思想なのだ……と、千歳に向う飛行機の中で、とりとめもなく考えていた。

暗い話しでこの感想文をしめくくするのは、まことに心外ではあるが、私にとってはこれが最も勉強になったことであり、よき体験であったから書きとめたわけである。

さて、50余名の参加者の皆さんにおかれましては、いかがなものだったでしょうか、この旅は？

いずれまた、どこかでお会いすることがあったら、互いの感想を語り合おうじゃありませんか。人それぞれに旅の感想があるのだから……。





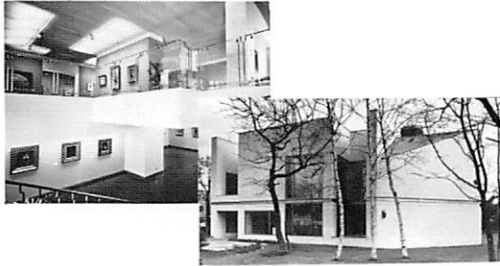
## 三岸好太郎美術館近況

### 著るしい入館者の増加

— 新開館 4 か月の歩み —

三岸美術館は7月1日、横路知事、堂垣内前知事、三岸節子氏など多数の来賓の御出席をいただいて、新美術館の開館式を挙行了した。新館は近代美術館に近く、閑静な自然景観に恵まれた知事公館庭園の一角に位置していることもあって、入館者は旧館時代に比べて飛躍的に増加し、開館以後10月末までの4か月間の入館者は2万8千827人をえた。旧館での1年間入館者が、1万6千人から1万8千人台を上下していたのに比べ、この増加ぶりはきわめて顕著なものといえよう。

増加の理由として考えられるのは、新しく建った美術館への一般的関心の高まりであるが、と同時に、建設された場所が近代美術館に近いという立地条件にあることを見逃がせない。それは近代美術館が特別展で



賑わっている日に、三岸美術館の入館者が多いことと、近代美術館の特別展が終了した後、展示替えのため休館中のときは目に見えて入館者が減少することで明らかである。

近代美術館を訪れた人が、知事公館庭園の景観を楽しむながら新三岸美術館にやって来るという、この美術の散歩道が、札幌のひとつの魅力ある場所になっているように思えてならない。新館が近代美術館の近くに居を移したことは、大きな成功であったといわざるをえない。

開館を記念して、新美術館では二つの記念講演会を実施した。7月2日、埼玉県立近代美術館長本間正義氏を迎えて「三岸好太郎をめぐる日本近代洋画の青春」、また新館の設計者である岡田新一氏の「三岸好太郎美術館の設計にあたって」を翌3日に開催した。毎年実施している美術館コンサートは、ことしは新築開館記念として「木管楽器による三重奏と室内楽」を、札幌のメンバーである村松時雄、一戸哲、岩崎弘昌の三氏により7月17日に実施した。

開館記念のもうひとつの事業として、三岸好太郎の筆彩素描集「蝶と貝殻」を複製したが、この素描集は三岸好太郎が昭和9年に限定百部を自費出版したもので、現存しているのは数冊にすぎず、こんどの複製版の制作は、三岸節子氏はじめ関係者に喜ばれた。

新館では旧館時代にはなかった喫茶コーナーも設けられ、多数の入館者の利用で賑わっている。



## 旭川美術館近況

### 館に寄せる期待と関心は大きい

昨年7月24日に開館した当館は、本年9月15日(敬老の日)に開館以来10万人目の入館者を迎えました。この時期に開催していた柳原義達彫刻展も、本道では旭川のみと言うこともあってか、全国4会場の中で最多観覧者を記録しました。講演、講座など教育普及事業への参加も良く、なかでも美術図書の一般閲覧は好評です。理解・鑑賞の一助としてのビデオボックスも本年度から導入されました。

これらの状況は、人口36万の都市(道北圏77万人)としては高い利用率で、当館に寄せる期待と関心の大きさがうかがわれます。

協力会関係については、旭川の会員数は51名(法人3、個人48)で、当館からも「館だより」、展覧会案内等を送って来館を呼びかけ、積極的利用と会員の増加を期待しているところです。

展覧会は年間8回ですが、会員証による観覧は各展とも23名前後とほぼ一定していますが、「シュールレアリスム展」では80名を越える利用者がありました。これは札幌方面からも多くの来館者があったことによるものです。

前年度事業ではありますが、3月5日の「三岸好太郎展」記念コンサートは、協力会の援助により当館ロビーで開催されました。事前申込の240名は満席となり、ご案内した旭川会員も多数参加いただき好評でした。

ようやく開館後1年を経過したところですが、今年は一会員が1名の新会員をおさそいいただき啓蒙的活動力となってくださることを期待する次第です。

これからあと今年度の展覧会は、開催中の赤レンガ庁舎の絵画展(12月18日まで)に引き続き1月5日からは当館企画の木の椅子は語る展など3回予定されておりますが、特に木の椅子展は旭川周辺を中心に20名余の作家からの作品が寄せられるなど木工の街に話題を呼んでおり、その期待に応える展覧会にしたいと思いますので多くの方で観覧をお願いします。

## 常盤会(旭川ボランティア)近況

道立旭川美術館ボランティア常盤会として、発足しましてより満1年を経過しました。スタート致しました当時は館側の御指導と、草創の意気と申しましょうか、何かお役に立ちたい思いを結集して、準備に取りかかり無我夢中の日々であったように思います。

一つ一つ新しい事にぶつかる緊張感、不安感、責任感、熱心な余り行き過ぎる事も、しばしばありましたのもよい思い出となりました。私は一体何をしているのだろうか、幾度か反復しながら、自分自身に問いかけ会員相互の和があってこそ、よりよいボランティアが出来るのだと信じて、ある日突然一同に会した50

名にそれを求める事のむずかしさも知りました。

この1年作品の、かわる毎に例会を持って話し合い、お互いの問題解決に努力して参りました。

確かに思考錯誤の年であったように思います。喫茶コーナー、図録販売、解説にも取りくみました。

来観者の方より、おほめの言葉あり、又御注意もあり、戸惑う事もたくさんありました。お立ち寄り下さるお客様が静かに、余音を楽んでお出でのお姿は、忙しく働く者にとっても心良い憩いとなって居ります。

今では六班の班に分かれて、編成されました会員は我が班こそはと、張り切って居ります。規約の上での50名は固く維持し、新たにボランティア申込み者は、仮登録をして待機して頂いて居ります。

全く何も解らなかつた私共でしたが、館側の御厚意により、催し毎の美術講座を持って下され、年一度の研修旅行などで、見聞を広める事が出来ますのも、何らかのお役に立てれば幸いと考えて居ります。

当初の事を思う時、皆さんの熱意で、大きく進歩し、軌道に乗って参りました事を、大変嬉しく思います。

この実りつつある活動に会員一同益々、心を引きしめて、各自が満足できるような奉任をしてこそ、美術館に対しての立派なボランティアといえるのではないのでしょうか。  
(高階美喜子記)

## ボランティア 活動報告

### 「子どもと親の美術館 '83、

「子どもと親の美術館」シリーズは、今回で6年目を迎えますが、私共ボランティアが参加するのは初めてのことでした。日頃、もっともっとたくさんの方が美術に関心を向けて下さることを願って、活動を続けている私共にとって、「遊びのコーナー」の監視、アドバイスという仕事を通して、この企画に協力できることは幸せでした。

私達は、色に対して強い固定観念を持っています。

今年のテーマは「色」。作品解説する上でも避けて通ることのできない大切な問題ですから、勉強の良いチャンスとなりました。

そこから自由に解き放されたらどんなに楽しいでしょう。「遊びのコーナー」のガラス越しに、白ならず、赤や青の雪ダルマの親子が立っています。室温で曇るガラスを、仕事ながら雑布で拭いては、大きな額縁を通してカラフルな雪ダルマを眺めたことでした。

固定観念といえば、私も担当なものだと自覚したのは、色ロープを使って床の上で自由な絵を描くコーナーでのこと。まず試しに赤屋根の家を輪郭で表現しようとしている私の側で、一人の少年が後を続けてくれました。ロープをきっちり並べ、緑に生えそろうた芝生を作り、その横に、青と黄のロープを積み上げて築山を築いたのです。まず輪郭をと思うのは大人の感覚、子供は面も立体もある立派な造形までたちどころ

に飛躍するのですからたのしいものです。

隣りのコーナーでは、数人の子供が組み木に夢中です。ヒントを与えるとたちまち解決する子、教えられるのを避けてじっくり考え抜く子、二組使って大作に挑む子、それぞれに個性が表われていて、観察しても飽くことを知りません。そんな折、知人が子供連れでやって来て、ユニークな企画を絶賛した後、絵画展示のコーナーは、子供はどうしても素通りがちなので、解説でもあったら感想を寄せてくれました。態勢が整った将来には、私共ボランティアによる解説が実現できるかもしれません。

冬休み中のことで会場はけっこう混み合っています。大きな万華鏡が台からはずれはしまいか、色模様配列された立方体が傷んではしまいか、組み木の紐がからまってははいないかなど、絶えず気を配りながらの忙しい4時間はいつの間にか過ぎてゆきました。

この展覧会は、1月5日から30日までの22日間、午前、午後に分かれて、売店係、解説係とで延べ88人が協力したことになります。そして携った誰れもが、来館者との接点に立ったこの仕事に大きな喜びを思い出したに違いありません。  
(片山美代記)

### 「サマーミュージアム '83、

「楽しく学べる美術館」として毎年夏休み期間中開催されているサマー・ミュージアムも今年で3回を迎えました。年を追うごとに入館者も増え、このたびは昨年の倍を越す8千4百余名を記録して協力した私達にとっても嬉しい結果に終わりました。

この事業は例年、展覧会、映画会、実技講座の部門で構成されていて、ボランティア部の今年の受持ちは展覧会場係です。「だまし絵、かくし絵、ふしぎな絵」という視覚を基にした「遠近のトリック」、「錯覚と錯視」、「かくし絵のいろいろ」等のテーマで、日頃私達がなげなく見過している自然や、身の廻りの現象を絵画の世界と結びつけてわかりやすく解明しているものです。視点を変えたり鏡に写った時だけ正しい画像が見える「ひずみ絵」、一つのものが二通りに見える有名な「ルビンの盃」の多義図形、目の混乱をおきる動く錯視、等大人の方にも大へん好評のようでした。今回はパネルによる展示が多く、その説明、遊具の使い方、場内整理や誘導も行いました。期間は7月28日から8月7日迄の10日間で、一日に午前と午後の二交代で5ヶ所10名、延べ百人で担当です。昨年は丸一日現場に立った人も、今年は控えめに半日なら大丈夫、と当たってみたのですが、入館者の大幅増という思わぬ誤算に嬉しい悲鳴をあげながら、寄る年波に勝てずで状況の変化に対応しきれず、つい腰を下したりと失態を演じて、来年はしっかりローテーションを組まねばと反省したものです。

とは言え、「今日で終わりですか」と残念がる方、「とても良い企画ですね、これからもぜひ続けて下さい」と教育関係者のような方、様々な反響、おほめの言葉や励ましをいただくと、御苦労された学芸員の方には



まったく申し訳なく思いながら、現場でしか触れることのできない手応えも味わえる訳です。そして半面、来館者と直接接触する私達の対応がとても大事であることを痛感させられるものです。

「心」を育むことがいかに大切か問われているこの頃、幼い頃から（遊びを通して芸術に触れる）機会を、美術館が与えて下さることは、豊かな感性、心、の成長に大へん意義深いものと思うし、このユニークな企画が、定着し発展するよう、館と来館者の間にたって呼吸を通わせた協力活動が実践される時ボランティア自身、一つのステップにつながり、新たな可能性も見い出せるのではと考えるのです。（白岩靖子記）

### ポスター配り — 手渡しのよさ

ポスター配布の仕事は、ボランティア部の活動の中でも大きな位置を占めております。

けれども、最初からこのような形だったわけではなくて、せっかくの良い展覧会なのだから、大勢の人に知ってもらい、見に来てもらいたいという気持ちから、個人の意志で自発的に配布していたのです。それが現在のように組織だった活動になったのは、55年4月の「ルドン展」からです。

その時から現在まで、美術館で開かれる全ての展覧会のポスターを配っています。配る場所は中心部のギャラリー・ホテル・デパート・喫茶店や、図書館・病院などで、火曜日はこれこれの場所、水曜日はどこどこというように、曜日毎に分担して配っています。

又、その他に、部員個人の家の近所で効果的だと思う場所に、それぞれがお願いして貼ってもらっています。

「自分のところにも、ぜひポスターを貼りたい。」という申し出があったりして、配る場所は次第に増えてきて、270箇所にもなっています。そのうち、公共施設の方は100、人で配る場所は170ほどの数になっています。

毎回、同じ人が同じ所にポスターを持って行きますので、ギャラリーなどでは顔なじみになり、「今度は何の展覧会ですか。」などということから、次の展覧会のことで話をしたり、時にはギャラリーに展示してある絵を説明してもらいながらゆっくり見せてもらったり — といった交流もあります。

大抵の配布先では、ポスターを持って行くのを待っていてくれて、何かの都合で持って行くのが遅れると、「まだですか。」と催促されたりするようになりました。又、展覧会が終るのを待っていて、「ぜひ、そのポスターを下さい。」と頼むお得意さんがいるのですよ。と話すところもあります。

郵送ではなく、展覧会の説明をしながら直接手渡すというこの方法が、宣伝をより効果的にしているといえると思います。それだけにこの任事は、責任の重い大切な仕事だと、配るたびに実感します。

これからも、できるだけ多くの人々に、美術館の催物を知ってもらい、足を運んでもらえるよう、この活動を続けていかなければならないと思っています。

（齊田道子記）

## 事務局 だより

### ●昭和58年上期の収支実績について

本年5月28日の通常総会で承認された57年度の決算と58年度予算の詳細については、6月1日付文書でお知らせした通りですが、これを概括的に一表にして見ると次の通りになります。参考のため55、56年度の実績ものせましたので比較して御理解下さい。

#### （収入の部）

		（単位千円）	
年 度	合 計	一般会計	特別会計
58年度予算	46,256	8,392	37,864
57年度実績	48,732	9,920	38,812
56 "	43,953	7,856	36,097
55 "	40,830	5,358	35,472

#### （支出の部）

年 度	合 計	一般会計	特別会計
58年度予算	45,129	7,813	37,316
57年度実績	45,723	7,428	38,296
56 "	40,087	4,493	35,594
55 "	38,003	3,157	34,846

#### （次期繰越利益）

年 度	合 計	一般会計	特別会計
58年度予算	1,127	579	548
57年度実績	3,009	2,492	517
56 "	3,865	3,363	502
55 "	2,827	2,202	625

#### 一説 明一

収入面では、57年度決算は55年度に比較して約20%の増収になってきており、特に一般会計の増え方が著しいのは、会員が急増したからです。55年度の会員数は、419（法人も含む）だったものが、57年度末では旭川美術館のオープンもあって647になり、今年9月末では、785となって急速成長を物語っております。

一方、支出面も収入の増大につれて増え、最終利益は横這いというところでは。

これは一般会計では、会の目的とする各種事業が本格化して、活動が活発になってきたことに因るものです。特別事業も赤字ではないが種々制約があって、なり振りかまわずもうける訳に行かない所があります。

売店事業は美術館にふさわしく利益の低い図録類が主体となります。いま、売店部会では、協力会独特にして、美的感覚もあり来観者に悦ばれ、而も適正な利益の出る商品の開発を検討しております。

駐車場も来観者が増えるにつれ、収入も増えているのですが、道の財政確保の見地から道からの借地料が毎年値上げされ、思うようにならないのが泣き所です。

特別事業は、本来はもっと利益を上げて、一般会計に寄与するためにあるのではないかと思うのですが、残念ながらいまの所、その役割を果たすまでに至っておりません。

## ●昭和58年上期の収支実績について

本年度の上期の収支状況を表にすると次の通りです。

(収入の部)		(単位千円)			
年 度	合 計	一般会計	売 店	駐車場	
本年上期	33,645	6,796	17,886	8,963	
予算遂行率	71.6%	64.4%	74.8%	64.2%	
前年同期比	109.2%	82.8%	116.7%	120.8%	

(支出の部)					
年 度	合 計	一般会計	売 店	駐車場	
本年上期	25,156	3,600	16,027	5,529	
予算遂行率	54.3%	42.9%	67.0%	39.6%	
前年同期比	106.7%	96.3%	112.1%	99.6%	

### 一説 明一

収入面は総体で前年比で9%の伸び、予算に対し、71%迄こなしていきます。

一般会計は昨年比減っているかに見えますが、昨年100万人の寄付金収入があったこと、前期繰越利益が多かった事に因るもので、実質は会員の増大で会費収入は増えているのです。

また特別会計も増えていますが、売店では、特設店の売上げが大きかったこと、駐車場は、5月の値上げと利用者の増加によるものです。

一方支出面は、総体で前年比6.7%のアップですが収入の増加率よりは低くなっています。予算に対しては50%の実績です。

一応、収入と支出を差引いた額が利益となり、好調に見えますが、これは一般会計では会費収入が上期に集中するのに対し、支出は下期に集中するのです(名簿作成送達費、会報の発行、会員の集いの経費等々)。

また駐車場も冬季に入ると来観者が減少すること、思わぬドカ雪が来ると、200万や300万の除雪費がアツと言う間に出てくるので、楽観は許されないのです。

尚参考迄駐車場の利用台数を附記しますと次の通りです。

	58年度上期	57年度上期	備 考
入館者	12,471人	13,341人	93.4 (前年比)
一 般	6,494	4,164	155.9 ( " )
計	18,965	17,505	108.3 ( " )

## ●58年度の事業について

上期中の遂行状況は次の通りで、年度計画通りの進行を見せております。以下に事業毎の実績を見ると…

### 1、婦人美術講座

例年行っている当会の重要な事業ですが、本年は新聞の告知欄に予告した事もあって、申込みが殺到し、定員を遥にオーバーし283名に達しました。止む得ず抽選により50名を選びました。

6月15日、第1回目の講座をスタートさせ、11月9日現在で17回目迄終了し、12月7日、最終日を迎えます。この中からまた新しいボランティアが誕生する事を今から期待されています。

### 2、美術振興基金の積立

5月4日、58年度分として一般会計から予算通り100万円が道銀定期預金に繰入れられました。これで累計950万円に達しました。来年度は1,000万円の大

台に乗ることでしょう。将来は特別会計からも積立てられるようになれば、基金が早く大きくなりその果実(利子)が事業推進の強力な財源になるのですが…。

### 3、心身障害者の招待

9月30日、北広島のリハビリセンター入所者5名が、職員の介護をうけて、美術館見学のため来館されました。マックスエルンスト展と通常展を熱心に観た後、ボザールで副館長も同席していただき、お茶の時間を共にしました。協力会からは、本間、鈴木の職員が出て、車椅子を押したりしてお世話し、またお土産として、絵葉書セットを差上げ大いに喜ばれました。

尚これとは全く別ですが、8月20日に来館した、カナダのマッケンジー中学生の一行60名に対しても、美術館の依頼で絵ハガキ240枚を贈呈しました。

### 4、特別売店の設置

新年度は、4月、ベルギー展を皮切りに、5月、深井克美展、7月、チェコガラス展で、特売店を出したところ、何れも予想以上の売上げをあげました。その売上高は、ベルギー展386万円、深井克美展84万円、チェコ展177万円、合計約647万円に達しました。

なお開設にはボランティア部の強力な応援があったことを申添えておきたいと思えます。

また本年は、9月に、道南の松前、乙部の移動美術館にも出店し、従来は図録だけだったものを、絵ハガキ、額絵を加えました。しかし売上額は、松前が42,430円、乙部が71,530円、合計113,960円でした。今回は急であったため、準備不足で良い成績はあげられず、色々と反省や考えさせられる点がありました。

### 5、美術研修旅行の実施

海外の美術研修旅行も、当会事業の目玉商品でもあります。今回で第4回目になります。今回は、マドリードのプラド美術館、パリのルーヴル美術館等、それにオプションとしてアムステルダムのゴッホ美術館の見学コースを組入れて、11月20日から8日間のツアーを募集しました。

パンフレットを、7月下旬に、当会々員、札幌彫刻美術館、北海道開拓記念館の友の会々員、及び北海道国際婦人協会々員に送ったところ、申込みが殺到し、定員30人を、50人に広げて、対応しましたが8月下旬には早や満杯となり、キャンセル待ちが10人も出る大盛況となりました。

10月22日、11月5日の2回に亘り、打合せと研修会を開き、同行指導をいただく美術館鈴木第二学芸課長のスライドによる勉強会には、出席者は目を輝かせて聴き入りました。

参加できなかった人からは、来年も是非やってほしいという声が多く、事務局としても責任と張合いを感じております。

### 6、美術館事業の協賛と助成

上期で3件、札幌、三岸、旭川の美術館へ総計45万円を支出しました。

通年で200万円の予算です。

### 7、研修費の支出

会員が会員券を利用して入館した場合、後日、札幌、旭川の美術館から、入館料の請求がきます。協力会はこの研修費として支払っていることは御存知でしょうか。上期の実績は次の通りです。

4月 ベルギー展 102,000円 228人

4月	深井克美展	25,500円	110人
6月	ピカソ展	136,000円	296人
7月	チェコガラス展	105,000円	213人
8月	旭川美術館	39,900円	87人
9月	弘法大師展	160,400円	324人
	計	568,800円	1,258人

### 8、ボランティア部の活動

上期の活動実績について、ボランティア部から次の様な報告が寄せられております。

・売店活動	延	960人
・ポスター、チラシの配布		2,160枚
・常設展示室での作品解説活動	延	216人
・団体来館者に対する館内オリエンテーション	延	40人
・サマーミュージアム 10日間	延	100人

### ●諸会議

公式な会議は次の通り行われました。

#### 1、通常総会

5月28日(土)午後2時から映像室で開催され、57年度事業報告と収支決算報告、58年度事業計画および収支予算案が審議され、原案通り承認されました。内容については6月1日全会員に文書で通知した通りです。

#### 2、理事会

第1回 58年4月27日

- ・新規加入会員の承認  
加入申込169名が承認された。
- ・駐車場料金の一部改正

5月1日から一般利用者の基本料金200円を250円に改正する。入館者の料金は据置き。

- ・通常総会にかかる、57年度決算案、58年度予算案の審議。
- ・役員の改選

金野専務理事の退任が承認された。

同時に、北川事務局長の退任も報告された。

第2回 58年5月21日

- ・役員(専務理事)選任について  
木路毛五郎氏が選任された。

第3回 58年7月8日

- ・部組織の変更について  
専門部会の欄に詳細記入の通り
- ・海外研修旅行の実施について  
ヨーロッパツアーが採択された。
- ・新規加入会員の承認

今回101名が入会承認された。

- ・特別会員及び参与の委嘱替えについて

5月20日付、道教育庁社会教育部長の異動に伴って、寺山敏保氏に替って橋本礼三氏が委嘱された。

#### 3、専門部会

7月8日の理事会の決定に基づいて今般次の様に改編されました。

#### 部会組織と部員名

部の名称	部員名	備考
事業部	○小杉理事 和田理事 建部理事	○印は部長

	気境理事 阿部理事	
広報部	○高橋理事 木内理事 有坂理事 佐々木礼子 奥野静子 阿部要介	会 員 会 員
ボランティア部	○関川理事 (部運営委員)	
旭川美術館部	○馬場理事	
会員拡充 企画委員会	○山本理事 市川理事 北鳥理事 徳丸理事 和田理事 秋山理事 杉野日理事 国松理事 大広理事 九島理事 長谷井理事	
特別事業部	○谷理事 徳丸理事 馬場理事 関川理事	

#### 1. 部長会 58年8月27日

部会の皮切りとして、部長会が開かれて各部長より58年度の計画の概要が発表され、討議された。

#### 2. 会員拡充企画委員会 9月20日

会員の動態について事務局より報告をうけた後、会員拡大の具体策について検討する。

#### 3. 特別事業部会 10月1日

売店ボランティアの班長より、希望や意見を聴き、新商品開発の方向、および採用基準の要綱について討議する。

#### 4. 広報部会 10月8日

会報発行年2回を目標とし、第1回を年内に発行する事に決定する。

#### 5. 事業部会 10月21日

「会員の集い」開催について協議する。日時は12月3日(土)として、今後具体策を検討して実施に入る事に決定した。

#### 6. 部長会 10月29日

事業部会で決定した「会員の集い」について説明をうけ、細部について協議する。



## お知らせ

### ●会員の動態について

本年9月30日現在の会員の在籍は、総数は785人で、その内訳は次の通りです。

○個人会員	411人
○法人会員	36人
○賛助会員	332人
内訳(学生 210人、札幌ボランティア 72人、旭川ボランティア 50人)	
○特別及び名与会員	6人

となっており、昭和55年の会員が419人でしたから、3年で凡そ2倍近くに増えたことになり、大変おめでたいことなのですが……。

ところが、最近9ヶ月間の会員の動きをみると、入会89に対し退会は何と72もあり、差引実質増はたった17にしかならないということです。

しかも、退会者72のうち、68%に当たる49名の方が、在籍1年で退めてしまっている事が判ったのです。考えられることは、①人にすすめられて義理で入った。②入ってみたが魅力がない。ということでしょうか。

この対策をどうするかが、会員拡充対策委員会の重要なテーマになります。12月3日に行われる事になった「会員の集い」もこの辺の有効な対策の一つになりたいと願っております。

### ●会費の納入状況について

会員の動態に関連して会費の納入状況はどうなっているでしょうか。

9月16日現在で調査してみたところ、普通会员406人のうち、納入済者は294人、未納者は112人(27.5%)もあり、そのうち、当年度の未納は63人、2年以上の未納が49人居ります。長年月の未納者は会員であって会員でなきが如く、いわゆる「睡眠会員」というのでしょうか、何れは退会の心配もある方々で、誠に心細い限りです。もちろん事務局では、時期がくれば、催促状を送っているのですが、サラリーローンの如く厳しく取立てる訳にもゆかず、会員の自覚にまつ他なさそうです。どうか会費納入についても御協力下さい。

### ●会員名簿について

このたび、3年振りで名簿を作成して10月28日発送しましたのでお手元についたことと思います。作成費は一部345円、郵送料240円かかり、総額で約38万円を要しました。

住所変更で戻ってきたものがありました。住所が変更になった時はなるべく早くお知らせ下さい。

### ●事務局の動き

今春、北川事務局長と高橋局長が退職し、後任に山田幸雄と本間道生が入局しました。その他に、鈴木節子と、売店係には、多田良子、若林喜美子 ベテランが従来通り頑張っております。

しかし、事務局も。会員の急激な増大、。事業遂行の活発化、。販売品目の種類の多様化、。駐車場の利用の増加で、毎年毎年、仕事量は増大する一方でアップアップしておりますが、何とか事務の合理化と一致協力でやり遂げたいと、及ばずながら努力しているつもりです。どうぞ今後も宣しくお願い致します。

### あなたも 会員になりませんか。

道民の共有財産である美術館は、私たち道民の豊かな心の象徴ともいえます。

社団法人北海道美術館協会は、その美術館を側面的に援助するためボランティア精神にもとづいてできた組織です。

美術館内における日々のお手伝い、あるいは美術振興基金の造成等によって、私たちの美術館を一層自慢できるものとしたいものです。

協会事業をさらに活発にするために広く皆様のご後援、ご参加をお願いいたします。

ご入会のお申込みは、事務局へお問い合わせ下さい。

社団法人 北海道美術館協会  
事務局 / 〒060 札幌市中央区北1西17  
北海道立美術館内 TEL 644-4025  
登録された日から次の特典等が受けられます。

●常設展及び館主催の展覧会は会員証を提示することで自由に観覧が出来ます。

●道立近代美術館内で協会売店でのお買物については会員は会員証の提示することで割引となります。(ただし書籍・図録は除く)

## 編集後記

師走に歩調を合せて焦りに焦る。

無風状態であった協会が、木路氏の専務理事就任よろしきも得、突然動き出し、さらに年末には初の「会員の集い、実施にまで発展したからたまらない。

当初の会報発行スケジュール等では、どうにも納らず、折角だからあれも載せたい、これも載せたい、遂に会員諸兄には賀状がわりとなりました。慎んでお詫び申し上げます。そのような訳で特に当会報発行には、多くの方々に、無理なご協力を戴きました。特に事務局の本間、鈴木両氏や広報部の佐々木さん、奥野さんの労作と言っても過言にあらざ、ここに改めてお礼を申し上げます。

次年度より年2回発行が目標。広報部一同なんとか実現を、と思っています。

会員諸兄の特段の御指導と御協力をよろしくお願い申し上げます。(T)